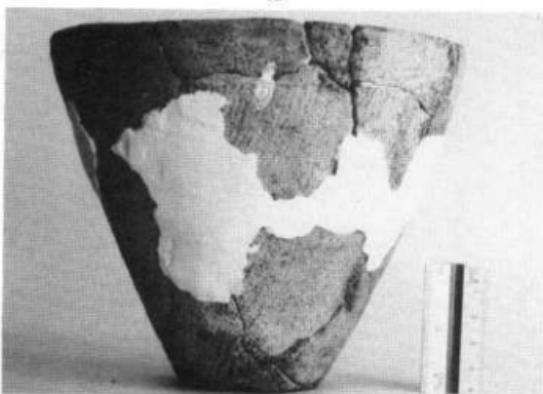


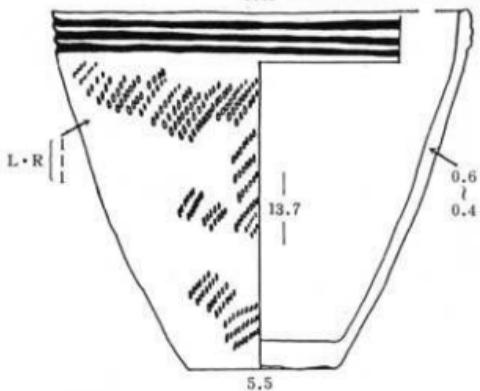
〔鉢形土器〕-52

〔K 2 Ⅲ〕 〈胸部一部欠損〉

52



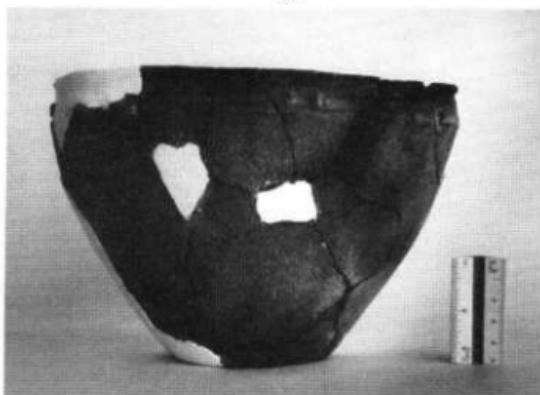
16.2



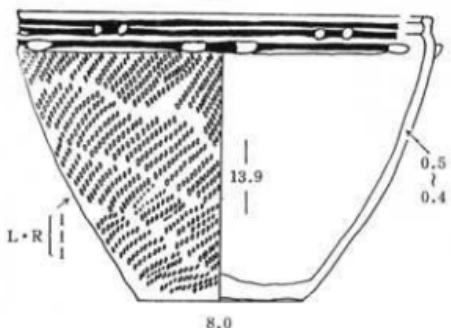
〔鉢形土器〕-52 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。

- このものの器形は、平縁で口頸部がわずかに内傾するもので、底面はやや不整であるが、やや上げ底である。この土器は、底面径に対して口径が大きく、きわめて整った器形である。
- 施文は、口頸部に3条の平行沈線がめぐり肩部下には繩文が施文される。
- 色調は、外面灰褐色、内面灰黄色、胎土には砂粒を多く含み、やや不良なるも焼成は良い。



20.1



〔鉢形土器〕 -53 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットⅡ層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。

- ・ このものの器形は、平縁で、口頸部は外反気味で肩部もかるく張るもので、鉢形土器としては、器高に対して胸部のふくらみが大きいものである。
- ・ 施文は、口頸部に2条、肩部に1条の沈線がめぐり、粘土粒を二段に付すものである。また、肩部下には繩文が密に施文される。

☆ 色調は、外面赤褐色、内面黒色、胎土・焼成とも良好である。

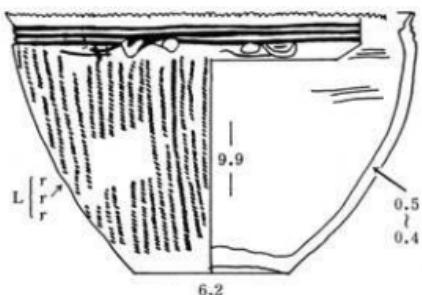
〔鉢形土器〕 -54

〔O12Ⅱ〕 (口縁部欠損一回上復原)

54



16.2



〔鉢形土器〕 -54 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、AN2 地区 O12 グリットⅡ層出土の第七群土器（大洞C1式）である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈するもので、口頸部は外反する。また、肩部も張るもので、胴部はふくらみが強い器形である。
- 施文は、口頸部に浅い平行沈線が3条めぐり、横に突出する小突起を2と1対ずつ2対つけるものである。また、胴部には、単軸撚糸文が縦位に施文される。
- 色調は、外面赤褐色、内面黄褐色で一部に煮沸痕が付着する。胎土・焼成は良好である。

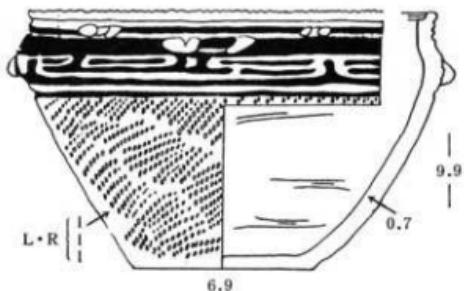
〔鉢形土器〕 -55

〔J 2 Ⅲ〕 (現存 $\frac{2}{3}$ — 図上復原)

55



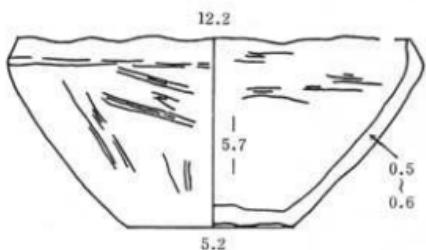
16.2



〔鉢形土器〕 -55 (半精製)

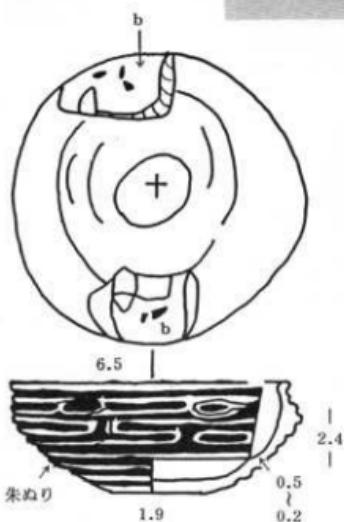
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第九群土器（大洞C 2 - A式→仮称）である。

- このものの器形は、口縁が波状口縁で、口頸部が外反し、肩部が強く張るものである。また、底面は平底をなすものである。
- 全体器形は、器高のわりに口径が大きく、胴部がふくらみ、幅広の鉢形土器である。
- 色調は、外面灰黒色一部茶褐色、内面上半黒色、下半茶褐色を呈する。



〔鉢形土器〕 -56 (粗製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリット II 層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- この土器の器形は、口縁が不整な小波状を呈しており、口頸部が強く内傾するものである。また、底面は、わずかに上げ底氣味であるが不整である。
 - 施文はないが、口頸部が内傾するため肩部が張り、口縁は横方向、胴部は右下りに擦痕が認められる。
 - 色調は、外面灰白色一部黒色、内面茶褐色、胎土は悪く砂粒を含む、焼成はやや良い。



(☆) b = 骨片

〔小形、鉢形土器〕 -57 (精製)

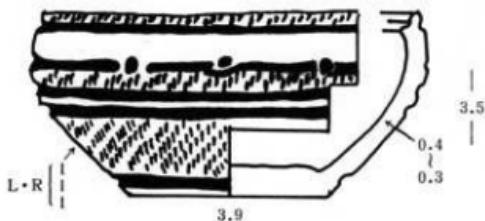
- ☆ このものは、A地区K2 グリットII層より出土した第十群土器(大洞A式)である。
- ・ このものの器形は、平縁で、口頸部は外反し、肩部が張る器形で、底面は平底のものである。
- ・ 施文は、小形ながら頸部に沈線が1条めぐり、その下に小突起を備えた沈線と「入り組み工字文」が完成されたパターンで施文されている。
- ・ 色調は、外面灰褐色、内面黒褐色を呈する。胎土・焼成とも良い。
- ☆ 実測図に「b」とあるのは獸骨片であって、資料にするため、(57)の土はとり除いていない。

〔小形、鉢形土器〕 -58 [K 2 II]

58



6.3



〔小形、鉢形土器〕 -58 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K2 グリットII層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものは、平縁で、頸部は内傾気味にカーブし、口縁がやや外反するもので、肩部が張る器形のものである。また、底面は平底を呈する。
 - 施文は、口縁直下に縄文と沈線1条、無文帯を頸部にもち、肩部に沈線と円形押圧文、胴部に2条の沈線と底部直上に1条の沈線があって縄文帯を区画しているものである。
 - 色調は、外面灰黒色、内面黒褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

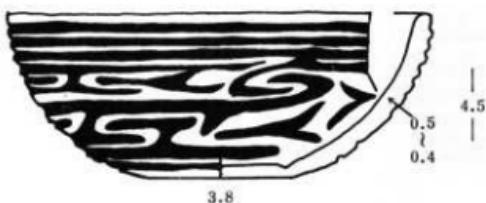
〔浅鉢形土器〕 -59

〔K 2 II〕 (現存 $\frac{1}{2}$ — 図上復原)

59



11.7



〔浅形土器〕 -59 (精製)

☆ このものは、A 地区 K 2 グリット II 層出土の第九群土器（大洞 C 2 - A 式→仮称）である。

- ・ このものは、平線で、浅鉢形としては塊形に近い器形のものである。なお底面は平底である。
- ・ 施文は、口頸部に 3 条、底面直上に 1 条の沈線によって肩部文様帶を区画している。この区画内には、「大洞 C 2 式」の主文様である曲線文と、「大洞 A 式」の主文様である「入り組み工字文」の未完成な文様が施文されるものである。
- ・ 色調は、内外とも赤褐色、胎土・焼成とも最良なものである。

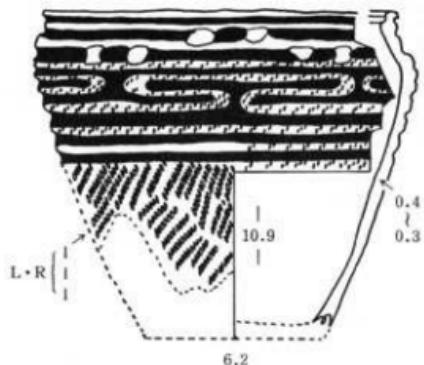
〔鉢形土器〕 -60

〔K 2 Ⅱ〕 (現存 $\frac{2}{3}$ —図上復原)

60



14.7



〔鉢形土器〕 -60 (半精製)

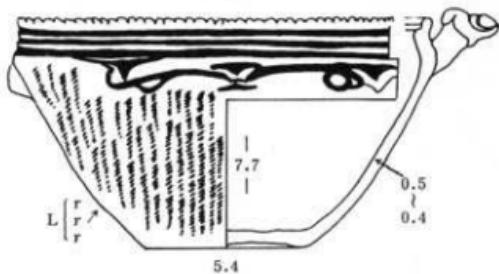
- ☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットⅡ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、肩部が張り、口頸部が外反するもので、鉢形としては、器高が高いものである。
 - このものの施文は、平縁の口縁下、すなわち頸部に2条の沈線と小粘土粒を付し、肩部にやや太い沈線と小粘土粒、胴部の中央には2条の沈線が施文され、これによって胴部文様帯を区画している。この胴部文様帯には、縄文を地文にして、完成された「入り組み工字文」が施文されたものである。
 - 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色一部黒色、胎土・焼成とも良好である。

〔把手付、鉢形土器〕 -61 (K 2 II) (口縁・胸部欠損一圖上復原)

61



14.0



〔把手付、鉢形土器〕 -61 (半精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットⅡ層より出土した第八群土器（大洞C 2 式）である。

- ・ このものの器形は、口縁が小波状を呈し、肩部には把手が付くもので、口頸部は外反し肩部が張る器形のものである。
- ・ 施文を見ると、口縁直下より頸部にかけては、3条の沈線がめぐり、肩部には横に突出する小突起をつける特異なものである。胸部には「単軸撚糸文」が縦位につけられている。
- ・ 色調は、外面黄褐色一部灰黒色、内面黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良い。

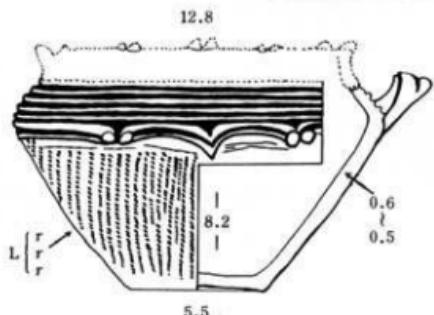
☆ この土器を一応大洞C 2 式としたが、多少疑問が残る。類例を待って、さらに考えたい。

〔把手付、鉢形土器〕-62

〔J 2 Ⅱ〕

(口縁部欠損—図上復原)

62



〔把手付、鉢形土器〕-62 (半精製)

☆ このものは、A地区 J 2 グリットⅡ層出土の第十群土器（大洞A式）である。

- このものの器形は、口縁が欠失しているため不明であるが、口頸部は強く外反するものと考えられる。肩部は張る器形で、この肩部には1つの把手が付くが、この把手の形態は特異なものである。底面は、わずかに上げ底である。
- 施文を見ると、肩部に沈線が5条めぐり、その5条目の沈線から、横に突出する小突起が付くものである。肩部下より胴部には、「単軸燃糸文」が縦位に施文されている。
- 色調は、外面明茶褐色、内面灰黒色、下半茶褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔深鉢形土器〕 -63

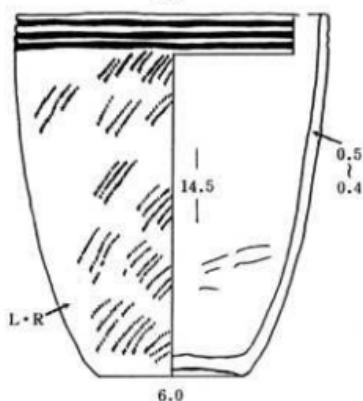
〔K 2 Ⅱ〕

(現存 $\frac{1}{3}$ —図上復原)

63



12.8



〔深形土器〕 -63 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A 地区 K 2 グリットⅡ層出土の第八群土器（大洞 C 2 式）である。

- このものの器形は、鉢形土器の器高を高くしたような全体形をしているものである。口縁は平縁で、口頸部はやや内傾気味のもので、肩部の張りはなく、底面直上のカーブがやや大きい器形である。なお底面は上げ底である。
- 施文は、口頸部に 3 条の沈線がめぐり、胴部には縄文が施文されている。
- 色調は、外面灰黒色、内面灰褐色を呈する。胎土・焼成ともやや不良である。

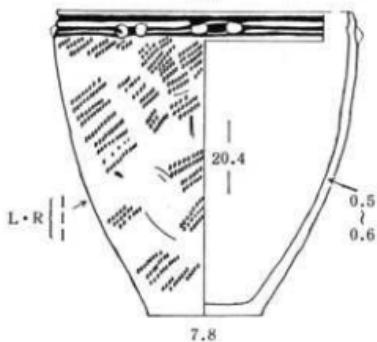
〔大形、深鉢形土器〕 -64

〔K 2 II〕 (一部図上復原)

64



20.0



〔大形、深鉢形土器〕 -64 (粗製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第八群土器（大洞C2式）である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部は内傾気味のもので、口縁がやや外反する。肩部は、低く丸味をもって張り、底部直上では内湾する器形である。このタイプは、大形深鉢形土器の一タイプである。
- 色調は、外面黄褐色、内面上半黒色（煮沸痕付着）、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

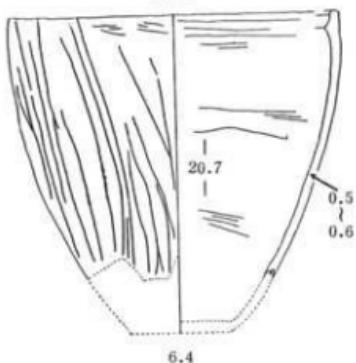
〔大形、鉢形土器〕 -65

〔K1 II〕 (現存 $\frac{3}{4}$ —図上復原)

65



21.6



〔大形深鉢形土器〕 -65 (粗製)

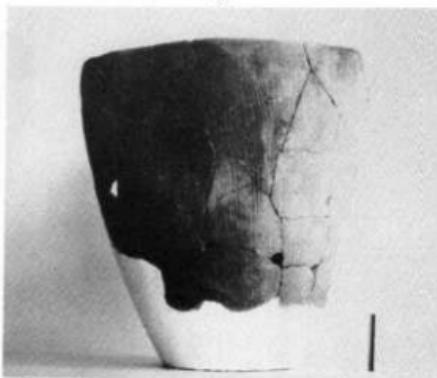
☆ このものは、A地区K1 グリットII層出土の第八群土器(大洞C2式)である。

- このものは、不整な平縁で口頸部はやや内傾するもので、口径に対して底径が小さいのが特徴である。
- 施文は、口縁下より条痕文が施文されるものである。
- 色調は、外面灰黒色、内面茶褐色、一部に煮沸痕がある。胎土・焼成とも良い。

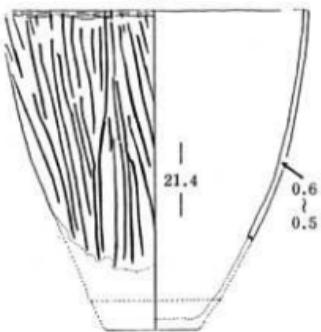
〔大形、深鉢形土器〕 -66

〔J 2 III〕 (胸下部欠損図上復原)

66



— 27.7 —



〔大形、深鉢形土器〕 -66 (粗製)

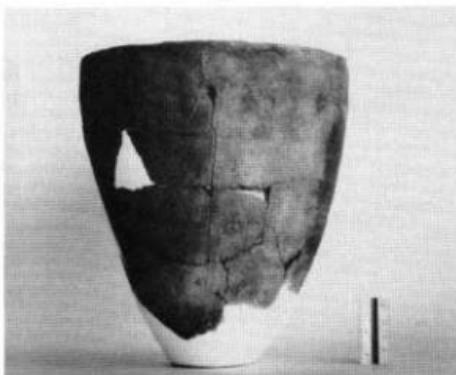
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。

- このものの器形は、やや不整な平縁で、肩部が張らず、口頸部はわずかに内傾するものである。胸下半は欠失しているため不明である。
- このものの施文は、(65)と同様口縁下より条痕文が施文されるものである。なお、このものの条痕文は(65)より太く深いものである。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面赤褐色一部黒褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

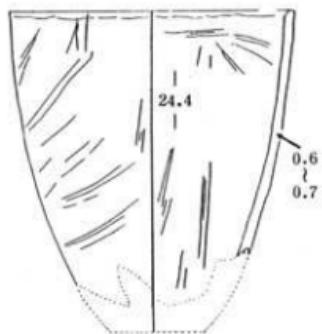
〔大形、深鉢形土器〕 -67

〔J 2 Ⅱ〕 (底部・削下部欠損—図上復原)

67



21.7



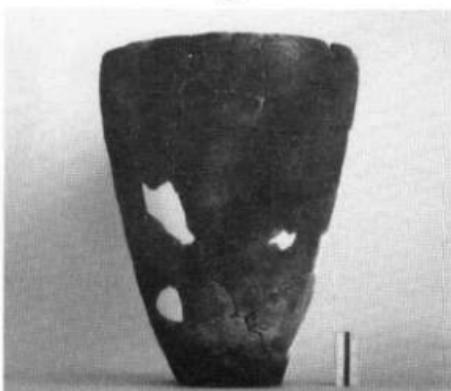
〔大形、深鉢形土器〕 -67 (粗製)

- ☆ このものは、A地区 J 2 グリットⅡ層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。
- ・ このものの器形は、平縁で、口頸部はわずかに外反氣味である。しかし肩部は張らず、この群の土器としては、器形にややふくらみがある。
 - ・ 施文は、口縁直下より条痕文を左下りに、また、やや右下りに極く少く施文するものである。
 - ・ 色調は、外面灰黒色一部黒色、内面黒褐色である。胎土・焼成とも良好である。
- ☆ この条痕文を施文した(65~67)は、一タイプとして把握できるものである。

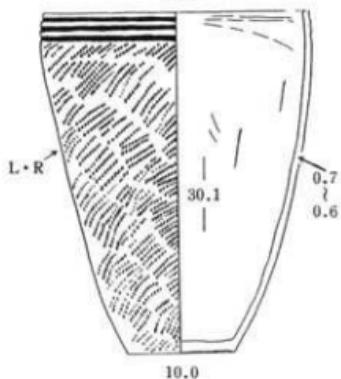
〔大形、深鉢形土器〕 -68

〔K 2 II〕

68



25.3



〔大形、深鉢形土器〕 -68 (粗製)

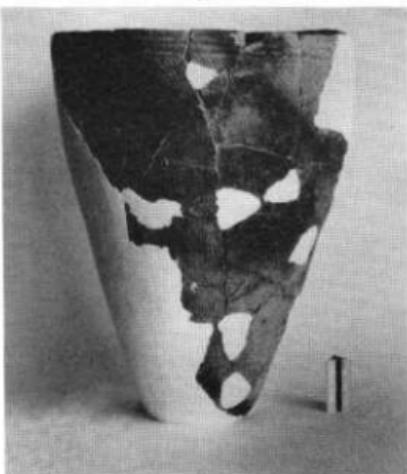
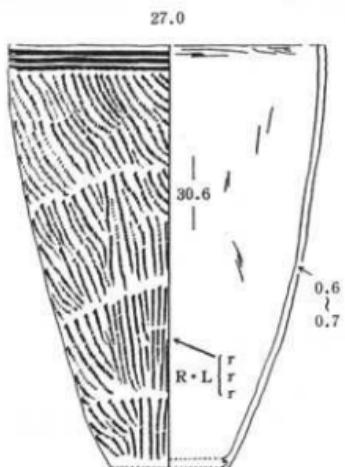
☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第八群土器（大洞C 2 式）である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部がわずかに内傾するもので、底面はわずかに上げ底氣味である。
- 施文は、口頸部に3条の平行沈線がめぐり、胴部には繩文が施文される。
- 色調は、外面茶褐色、内面灰褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔大形深鉢形土器〕 -69

〔J 2 II〕 (底部欠損—図上復原)

69



〔大形、深鉢形土器〕 -69 (粗製)

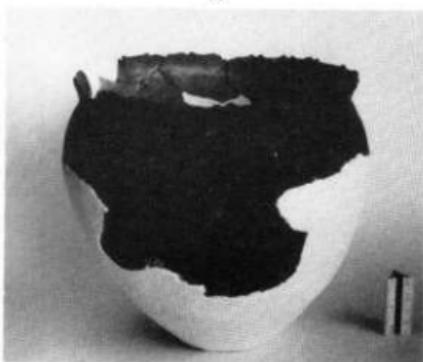
☆ このものは、A 地区 J 2 グリット II 層出土の第八群土器（大洞 C 2 式）である。

- ・ このものの器形は、平縁で、口頸部はわずかに内傾氣味である。底面は欠失しているため不明である。
- ・ 施文は、(68) と同様、口頸部に 3 条の沈線文があり、胴部には繩文が施文されるものである。
- ・ 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

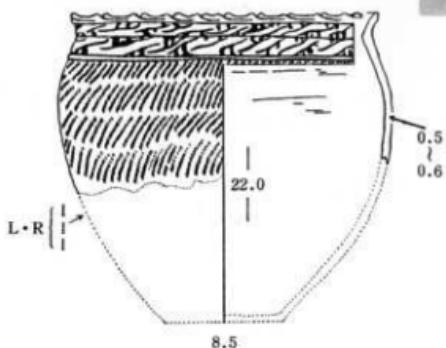
〔壺形土器〕 -70

〔J 1 III〕 (現存 $\frac{1}{3}$ 一図上復原)

70



22.4



〔壺形土器〕 -70 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区J 1 グリットIII層出土の第六群土器（大洞B・C式）である。

- このものの器形は、口縁は小波状を呈し、口頸部は強く外反するもので、肩部はまるくふくらみ、胸部もまた、球形にふくらむものである。胴下半は欠失しているため不明である。
- 施文は、口縁直下に沈線が1条、肩部に2条の沈線があり、これによって口頸部文様帶を区画している。この文様帶には「羊齒状文」が二段に施文されている。また胸部には、繩文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、外面黒色一部茶褐色、内面黒色一部黄褐色、胎土・焼成とも良好なものである。

〔台付深鉢形土器〕 -71

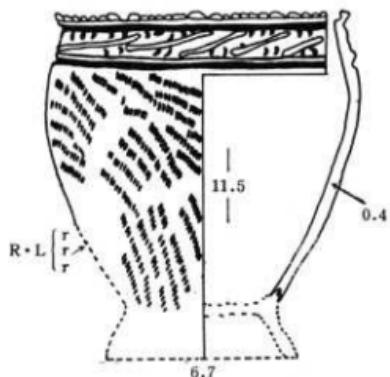
(J 1 II)

(現存 $\frac{1}{2}$ —図上復原)

71



10.0



〔台付深鉢形土器〕 -71 (半精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリットⅡ層出土の第六群土器（大洞B・C式）である。

- このものは、口縁が小波状を呈し、頸部は内傾し、口縁が外反するもので肩部はまるやかにふくらむ器形である。台部は欠失しているが、台付土器と考えられる。
- このものの施文は、口縁下に1条の沈線、肩部と胴部の境に1条の沈線があり、これによって頸部文様帶を区画し、そこには「羊歯状文」が施文されるものである。胴部には右下りの繩文が施文されている。
- 色調は、外面黒色、内面赤褐色、胎土・焼成とも良好である。

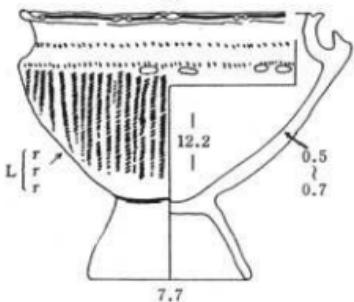
〔台付鉢形土器〕 -72

〔O10Ⅱ〕

72



14.2



〔台付鉢形土器〕 -72 (半精製)

☆ ここに掲げたものは、AN2 地区 O12 グリットⅡ層出土の第七群土器（大洞C12式）である。

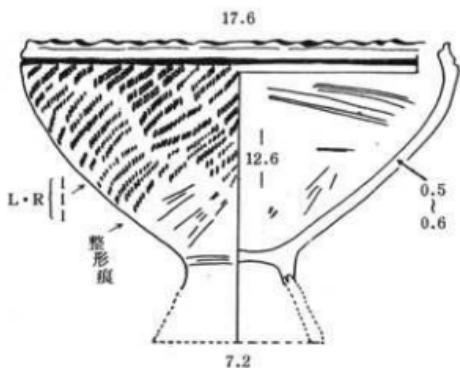
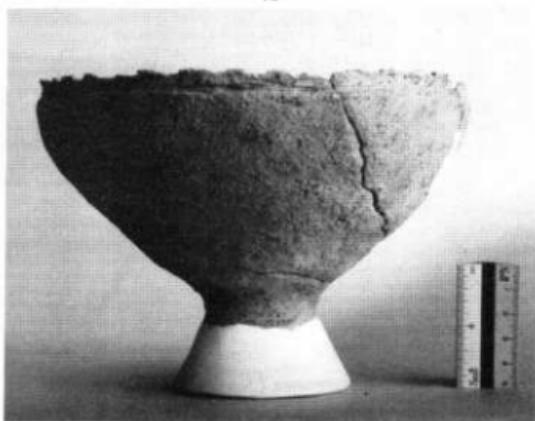
- このものの器形は、口縁にごく小さい山型突起を付すもので、ゆるい波状を呈する。口頸部は強く外反し、肩部には、把手が1つ付いている。胴部はゆるやかにふくらみ台部に至る器形である。
- 施文は、口縁上端に沈線1条、外反する頸部には刻目文が二段に付けられ、小粘土粒が付されている。胴部には、単軸撚糸文が縦位に施文されているものである。
- 色調は、上半黒色、下半黄褐色、台部赤褐色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔台付鉢形土器〕 -73

(K 2 II)

(台部欠損—図上復原)

73



〔台付鉢形土器〕 -73 (粗製)

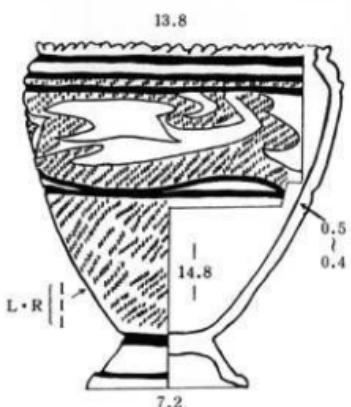
☆ このものは、A 地区 K 2 グリット II 層出土の第七群土器（大洞 C1 式）である。

- ・ 器形は、口縁が小波状を呈し、肩部から口縁にかけて強く内傾し、口縁がやや外反気味のものである。そのため肩部は張るがゆるやかに弧を描き台部に接するもので、台部は器形に比して小さいものようである。
- ・ 施文は、肩部上に 1 条の沈線がめぐり、胸部に左下りの繩文が施文されている。
- ・ 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色、胎土・焼成ともやや不良である。

〔台付鉢形土器〕-74

〔K 1 II〕 (3/4 現存—図上復原)

74



〔台付深鉢形土器〕-74 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K1 グリットⅡ層出土の第七群土器（大洞C1式）である。

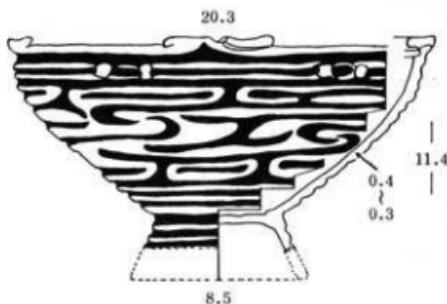
- ・ 器形は、口縁が小波状を呈し、口縁は強く外反し、肩部は丸味を持って張る器形である。台部は、裾広がりの器形で安定感のあるものである。
- ・ 施文は、口縁下に1条、肩部に2条の沈線がめぐり、胴中央部には2条の沈線が施文され文様帶を区画する。文様帶には大まかな磨消手法による浮彫文がある。文様は縄文が充填されており、文様がかなり横に広がっているので、次型式に近いものと考えられる。胴部下半には、文様帶に施文されたものと同じ原体の縄文がある。
- ・ 色調は、外面暗赤褐色、内面上半黒色下半暗褐色を呈する。胎土・焼成は良好である。

〔台付鉢形土器〕 -75

〔K 2 Ⅱ〕

(台部欠損一回上復原)

75



〔台付鉢形土器〕 -75 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A 地区 K 2 グリットⅡ層出土の第九群土器（大洞 C 2 - A 式→仮称）である。

- このものは、平縁であるが、4 対の小突起を付すもので、口縁は外反し、肩部が張る器形である。台部は末広がりのものと思われる。この台部の形態は一パターンである。すなわち、(74) と合わせ、二つのパターンが認められる。
- 施文は、口頸部に 3 条、胴部下端に 2 条の沈線によって胴部文様体を区画する。この文様体には、大洞 C 2 式の主文様である曲線文と、未完成な「入り組み工字文」が施文されるものである。なお台部下半が欠失しているが沈線文が施文される。
- 色調は、外面黄褐色、内面明黄褐色を呈する。胎土・焼成とも最良のものである。

〔晚期の土器〕

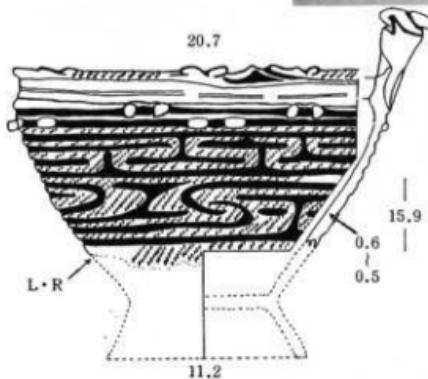
A・P・L 76

〔台付鉢形土器〕-76

〔k 2 II〕 〔把手付・台付鉢形土器〕

(現存 $\frac{1}{3}$ — 図上復原)

76



〔台付鉢形土器〕-76 (精製)

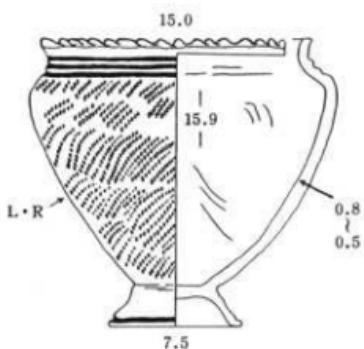
☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第九群土器（大洞C 2 - A式→仮称）である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、小突起を付すもので、口縁部は外反し、肩部は強く張るものである。また、このものには大型の把手が付いている。胸部下半は欠失しているため不明である。
- 施文は、(75)と同様、肩部に2条の沈線があり、粘土粒が2と1対ずつ二段に付されている。胸部には縄文を地文に、未完成の「入り組み工字文」と「曲線文」が施文されている。すなわち「大洞A式」と「大洞C 2 式」の主文様が認められる。
- 色調は、外面黒色（煮沸痕付着）、内面黒色、胎土・焼成とも良好で堅緻なものである。

〔台付鉢形土器〕 -77

〔J 1 III〕

77



〔台付鉢形土器〕 -77 (粗製)

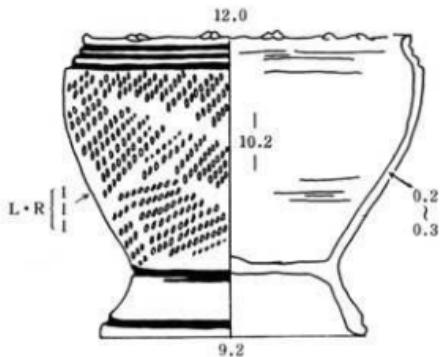
☆ このものは、A 地区 J 2 グリットⅢ層出土の第七群土器（大洞 C1 式）である。

- ・ このものの器形は、口縁が小波状を呈し、口頸部は強く外反するもので、肩部は強く張るものである。台部は既述の（74）と同様、一パターンをなすもので安定感のある末がりのものである。
- ・ 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面黄褐色（一部に煮沸痕あり）、台部赤褐色を呈する。胎土・焼成は良好である。

〔台付鉢形土器〕 -78

〔K 1 II〕

78



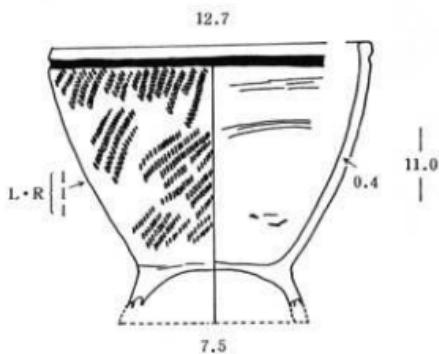
〔台付鉢形土器〕 -78 (粗製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K1 グリットⅡ層出土の第八群土器(大洞C1式)である。
- ・ 器形は、口縁が小波状をなし、小突起が付されている。口頸部は強く外半し、肩部が張るもので、胴部上半がふくらむものである。台部は、鉢形に対して大きく、安定は良いがズングリ形である。
 - ・ 施文は、口頸部に3条の沈線がめぐり、胴部には繩文が左下りに施文され、台部には、上下に各1条の沈線がめぐるものである。
 - ・ 色調は、外面黒色、内面黄褐色一部暗灰色、胎土・焼成とも良好である。

〔台付鉢形土器〕-79

〔K 1 Ⅱ〕 (現存 $\frac{1}{2}$ 、台部欠損一回上復原)

79



〔台付鉢形土器〕-79 (粗製)

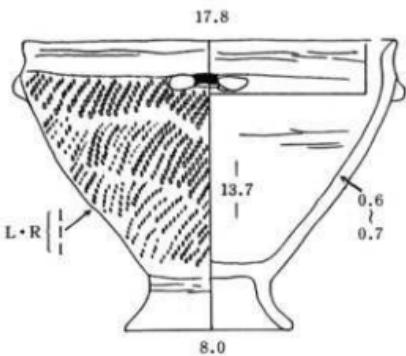
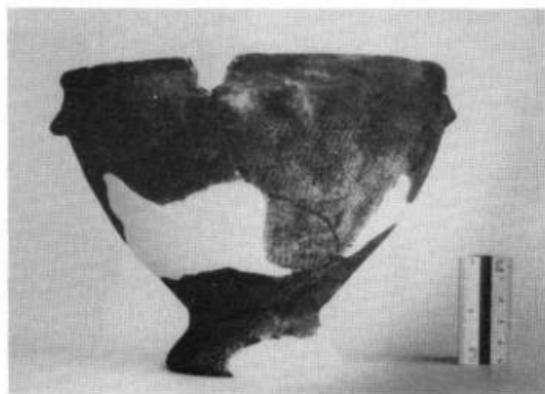
☆ ここに掲げたものは、A 地区 K 2 グリットⅡ層出土の第八群土器(大洞C 2 式)である。

- ・ 器形は、平縁で、口頸部は内傾するもので肩部が張らない器形である。台部は下半欠失しているので不明である。
- ・ 施文は、肩部上に 1 条の沈線がめぐり、胴部には左下りの縄文が施文されている。
- ・ 色調は、外面黒色、内面黒色（煮沸痕付着）、胎土・焼成ともやや不良である。

〔台付鉢形土器〕 -80

〔K 1 III〕

80



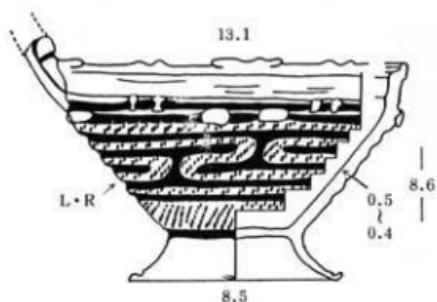
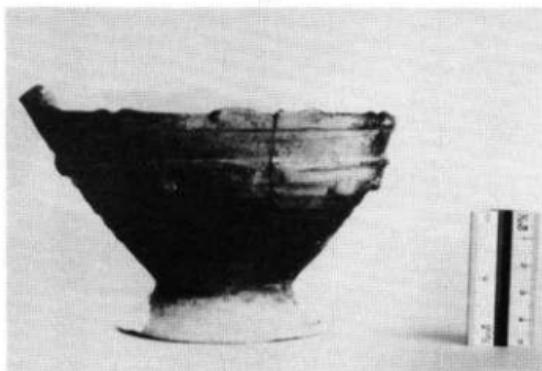
〔台付鉢形土器〕 -80 (粗製)

☆ このものは、A 地区 K 1 グリットⅢ層出土の第八群土器（大洞 C 2 式）である。

- ・ 器形は、平縁で、口頸部が外反し、肩部が張る器形で台部は、末広がりの安定したものである。
- ・ 施文は、頸部に無文帯をもち、肩部には 2 と 1 対の粘土粒を 4 対付けるもので、胴部には左下りの繩文が施文されている。
- ・ 色調は、外面灰黒色、内面黒色（煮沸痕付着）、胎土・焼成ともやや良好である。

〔把手付台付鉢形土器〕 -81 (K 2 II) (現存 $\frac{2}{3}$ —図上復原)

81

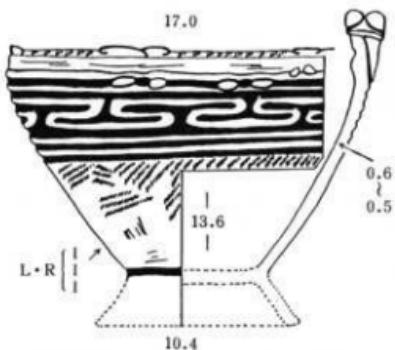


〔台付鉢形土器〕 -81 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、口縁には低いが横に広がる小突起とその両側に二叉山型突起を備えている。頸部は外反し、口縁が直立するもので、肩部が張る器形で把手が付いている。なお台部は末広がりで安定した台部である。
 - 施文は、肩部に2条の沈線がめぐり、そこには、粘土粒が二段に付けられる。また、胴部下位には沈線が1条、台部上端にも1条の沈線があり文様帶を区画している。
 - 胴部の文様帶には「入り組み工字文」が繩文を地文にして施文され、胴下部には斜行繩文がある。
 - 色調は、外面上半黒色、下半灰褐色、内面黒色、台部は明赤褐色、胎土・焼成とも良い。

〔把手付台付鉢形土器〕-82 (J 2 III) (台部欠損一図上復原)

82

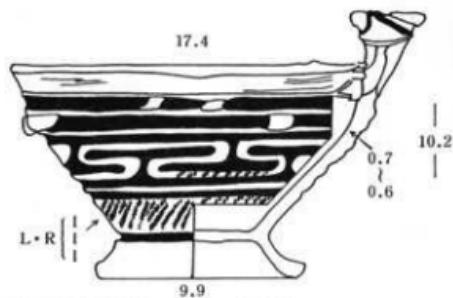


〔台付鉢形土器〕-82 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、平縁の口縁に低い小突起を付し、口縁は外反し、頸部はやや内傾気味のもので、肩部には直立する把手が付くタイプである。肩部は丸味をもって張り、台部は不明なるも、写真より器高が高い台部と考えられる。
 - 施文は、口縁に縄文、胸部中央下に縄文帯をもち、肩部から胸部上半の文様帶には、粘土粒をもつ沈線と、「入り組み工字文」が施文される。
 - 色調は、外面黒色、内面黒褐色を呈する。胎土・焼成はやや不良である。

〔把手付台付鉢形土器〕 -83 (K 2 II) (現存 $\frac{1}{2}$ — 図上復原)

83

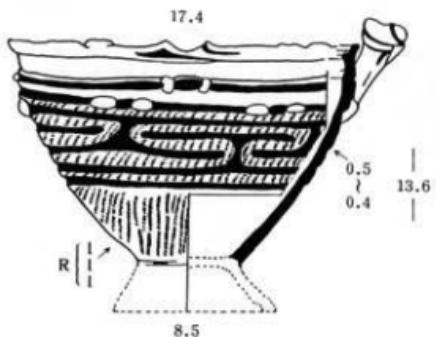


〔台付鉢形土器〕 -83 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区K 2 グリットII層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、平縁で、口頸部は外反し肩部が張る器形で台部は末広がりのものである。この土器には大きい把手が付くものであるが、器形全体で見ると器高が低いのが特徴である。
 - 施文は、肩部に太い沈線が2条めぐり粘土粒が二段に付けられている。また胴部下半には沈線が1条、台部上端にも1条の沈線があり、これによって、上部文様帶と繩文帶を区画している。上部文様帶には、完成された「入り組み工字文」が施文され、繩文帶には斜行繩文が施文される。
 - 色調は、外面上半灰黒色、下半黒褐色、内面上半黒色、下半灰黒色、胎土・焼成とも良好で堅緻である。

〔把手付台付鉢形土器〕 -84 (K1 II) (台部・肩部欠損一図上復原)

84



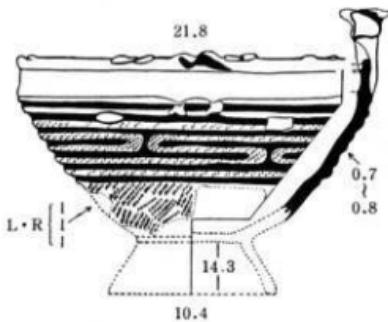
〔台付鉢形土器〕 -84 (精製)

☆ ここに掲げたものは、K1 グリットⅡ層出土の第十群土器（大洞A式）である。

- このものの器形は、波状口縁で口縁には、二叉山型突起と低い横形の突起が付くもので、口縁は外反し、肩部がやや張る器形で肩部には把手が付けられている。台部は消失しているため不明である。
- 施文は、二叉山型突起の一つに山形の沈線文が短かくつけられ、頸部は無文帶となっている。肩部と肩部下には、2条の沈線があり、粘土粒が2対1対ずつ付けられている。また、胴部中央下には1条の沈線がめぐり、上部文様帶と下部縄文帶を区画している。上部文様帶には、完成された「入り組み工字文」が縄文を地文に施文されている。下部の縄文帶には、縦位の単軸撚糸文が施文される。
- 色調は、外面上半灰褐色、下半赤褐色、内面黄褐色、胎土・焼成とも良好である。

〔把手付台付鉢形土器〕 -85 (J 2 III) (現存 $\frac{1}{2}$ —図上復原)

85



〔台付鉢形土器〕 -85 (精製)

☆ このものは、A地区 J 2 グリットⅢ層より出土した第十群土器（大洞A式）である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、その口縁には、二叉山型突起と低く横に広がる小突起を付すもので、口縁は外反し、頸部はやや内傾気味である。肩部は張り、胴部がゆるくカーブするものである。
- 施文は、二叉山型突起の下方に太い凹面をもち、頸部は無文帶をなす、肩部下には、沈線が2条めぐり、二段に粘土粒が付く、また、胴下半にも1条の沈線があって、上部文様帶と縄文帶を区分している。胴部の上部文様帶には縄文を地文に「入り組み工字文」が施文され、縄文帶には左下りの縄文が施文される。この施文パターンは(84)と同様である。
- 色調は、外面灰褐色、内面黒褐色、胎土・焼成とも最良である。

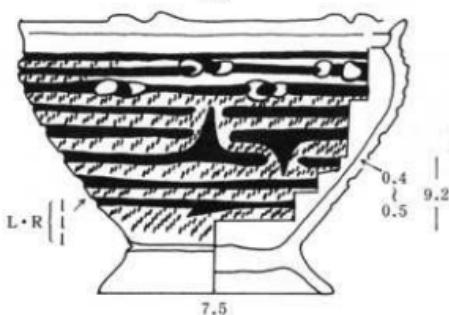
〔台付鉢形土器〕-86

(J 2 II) (現存 $\frac{1}{2}$ — 岡上復原)

86



13.0

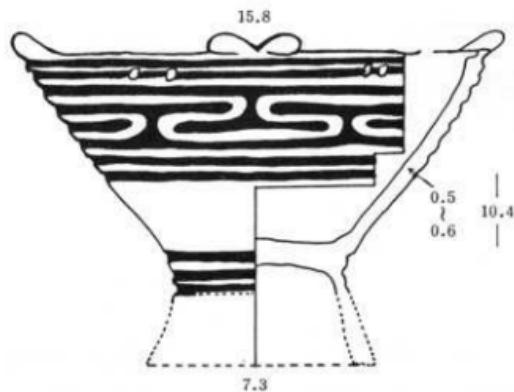


〔台付鉢形土器〕-86 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区 J 2 グリットⅢ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- ・ このものの器形は、口縁が波状口縁で二叉山型突起がつくものである。口頸部は外反し、肩部が張る器形で、台部は末広がりの安定した台部である。
- ・ 施文は、肩部に3条の沈線がめぐり、粘土粒が二段に付けられるもので胴下位にも2条の沈線がめぐる。
胴部には、「入り組み工字文」が繩文を地文にして施文される。すなわち、(83・84・85)と基本的に同様の手法である。
- ・ 色調は、外面灰黒色、内面黒色を呈する。胎土・焼成とも良好なものである。

〔台付鉢形土器〕-87 (K 2 II) (台部欠損一回上復原)

87



〔台付鉢形土器〕-87 (精製)

☆ このものは、A地区K2 グリットII層出土の第十群土器(大洞A式)である。

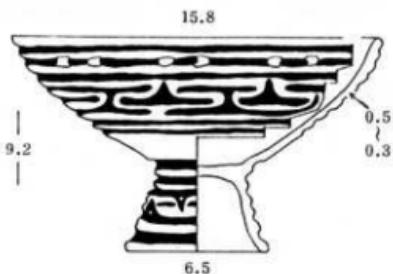
- この土器の器形は、平縁に突起を2と1対ずつ4対付けるもので、肩部が張らす、直線的に台部に接する鉢形をしており特徴のある器形である。
- 施文は、口縁下に2条、胸部中央下に2条の沈線によって施文帯を区画し、そこには完成された「入り組工字文」が認められる。台部は欠失しているが3条の沈線があり、胸部下半は無文帯となっている。このものは、(84・85・86)と異なり、無文帯をもつことによって独特の単順性を表現している。
- 色調は、外面茶褐色、内面灰褐色一部黒色、胎土・焼成とも最良である。

〔台付浅鉢形土器〕 -88

〔K 2 II〕

(現存 $\frac{3}{4}$ —図上復原)

88



〔台付浅鉢形土器〕 -88 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A 地区 K 2 グリット II 層出土の第十群土器（大洞 A 式）である。
- このものの器形は、平縁で、口頸部はやや内傾気味のもので、肩部の張りも少なく、形の整った器形のものである。台部は器高のあるもので、台付土器の台部の一パターンをなすものである。すなわち、(72・77) で代表される台部、および、(88) の台部とあわせ、この 3 タイプが基本であろう。
 - 施文は、口頸部に 3 条の沈線があり、胴下位に 2 条の沈線がある。その間に「入り組み工字文」が施文されるパターンは、この土器においても確立している。台部にも「入り組み工字文」が施文されている。
 - 色調は、内面・外面とも朱ぬりのもので赤褐色を呈する。一部に黒色斑点がある。胎土・焼成とも最良である。

(3) 〔壺形土器〕

〔K 2 Ⅱ〕

(胸下半欠損一回上復原)

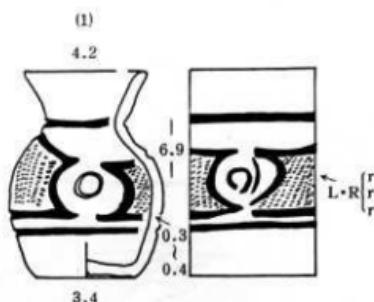
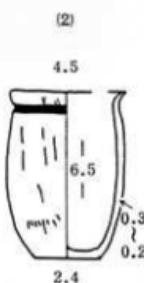
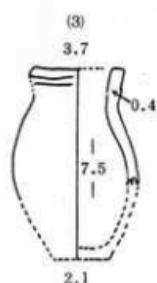
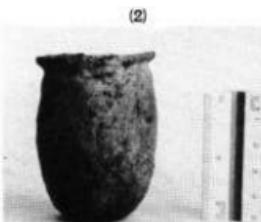
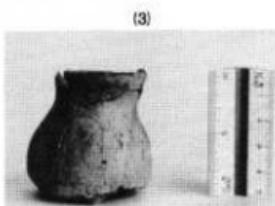
(2) 〔小形壺形土器〕

〔J 2 Ⅲ〕 (完形品)

(1) 〔小形壺形土器〕

〔J 1 Ⅱ〕 (完形品)

(1)



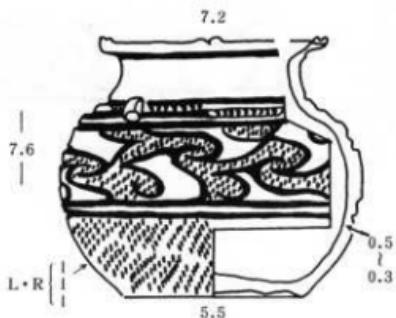
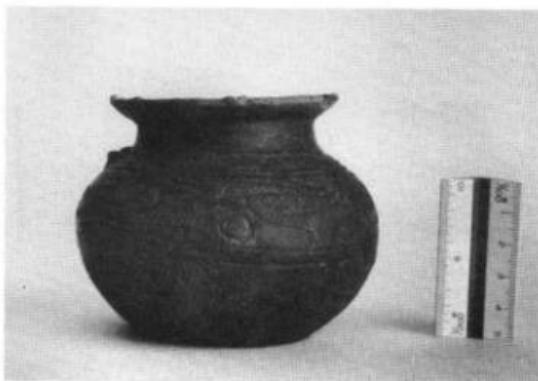
〔小形、壺形・壺形、土器〕 -89→ (1・2・3) (1→半精製、2→粗製、3→粗成)

☆ ここに掲げたものは、(1)J 1 Ⅱ、(2)J 2 Ⅲ、(3)K 2 Ⅱの各グリット、各層から出土したものである。すなわち、(1)は第三群土器（十腰内Ⅰ式）、(2)は、一応第三群土器（十腰内Ⅰ式）の仲間としておく。(3)は、第八群土器（大洞C 2 式）であろう。

- ・ 器形は、(1)はこの期の典型であろう。(2)は一見して土師器とも思われる器形であるが類例を待ちたい。(3)は下半が欠失しているが、実測図のように考えられる。
- ・ 施文は、(2)、(3)は無文、(1)は磨消手法を見せる施文法で、上下の沈線と、円形文を見る施文法である。
- ・ 色調は、(1)黒褐色、(2・3)は灰黒色を呈する。胎土・焼成は(1)は良好で、(2・3)はやや不良である。

〔壺形土器〕-90

〔J 1 II〕 (完形品)



〔壺形土器〕-90 (精製)

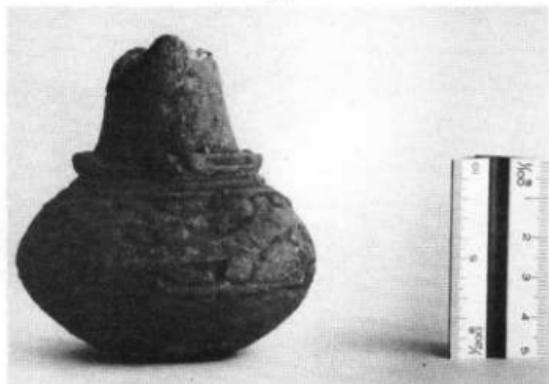
☆ ここに掲げたものは、A地区J 1 グリットⅡ層出土の第七群土器（大洞C 1式）である。

- この土器の器形は、平縁の口縁に小突起を付すもので、口頸部が強く外反する器形で、胸部はふくらみ底面は上げ底である。なお、この壺形土器は、広口壺とも言える口径である。
- 施文は、上下の沈線で文様帯を区画し、刻目文と繩文を充填したK字文が施文され、下半は繩文帯をなすものである。
- 色調は、外面赤褐色、内面赤褐色、胎土・焼成とも最良である。

〔壺形土器〕 -91

(J 1 II) (口縁部欠損一圖上復原)

91



〔壺形土器〕 -91 (精製)

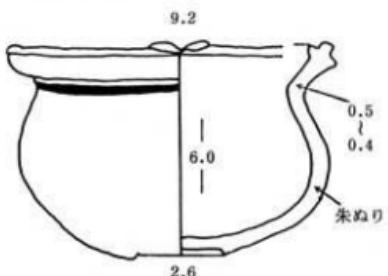
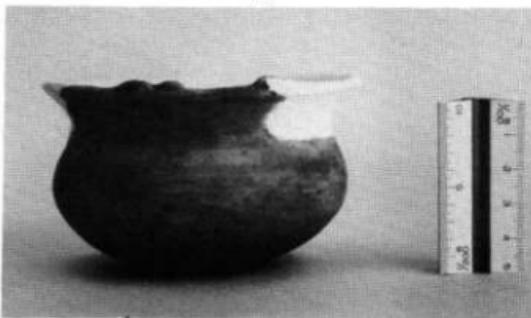
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリット層出土の第七群土器（大洞C1式）である。

- この壺形土器は、口頸部は長く、長頸壺である。最大幅は下半にあって、底面は、上げ底である。
- 施文は、沈線によって口頸部と胴部の施文帯を区分し、下半は無文である。文様帯には、浮き彫りのK字文が施文され、朱ぬり土器である。
- 色調は、内外面とも朱ぬりで黒褐色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔広口壺形土器〕 -92

〔J 1 II〕 (口縁一部欠損)

92



〔広口壺形土器〕 -92 (精製)

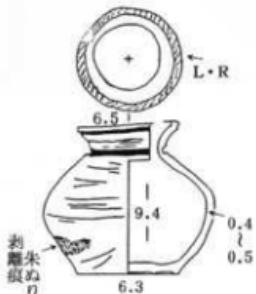
☆ ここに掲げたものは、A地区 J 1 グリットⅡ層出土の第八群土器（大洞C 2式）である。

- ・ このものは、広い口径をもつもので、平縁であるが口縁に小突起をもっている。口頸部は強く外反するもので、胴部の最大幅は中央下にあってふくらみの大きい器形で、底面は上げ底である。
- ・ 施文は、頸部と胴部の境に沈線が1条めぐる他は無文であるが、器表面、内面とも朱ぬりのものである。
- ・ 色調は、内・外表面とも灰褐色で一部黒色の斑点がある。

〔壺形土器〕-93

〔K1 II〕

(2)



〔小形、壺形土器〕-93-(2) (精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K1 グリットII層より出土した第八群土器（大洞C2式）である。

- このものは平縁で、口頸部は強く外反し、胸部は強くふくらみ、胸部の最大幅は、中央下にあり、底面は、わずかに上げ底氣味である。
- 施文は、口縁直下に1条、頸部と肩部の境に1条の沈線文が施文される。整形痕が認められる。
- 色調は、外面赤色一部黒色、内面も赤色で、胎土に砂粒を含むが胎土・焼成とも良好である。

〔J2 II〕

(1)



〔小形、壺形土器〕-93-(1) (精製)

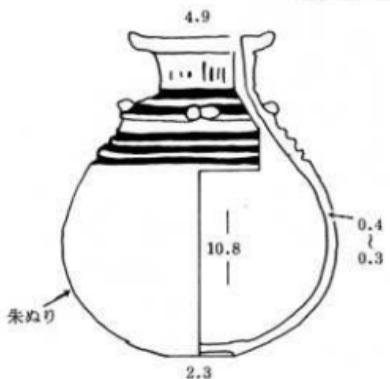
☆ ここに掲げたものは、A地区J2 グリットII層出土の第八群土器（大洞C2式）である。

- このものは、口縁は平縁で、頸部がやや末広がりを呈し、胸部は洋梨状を呈するもので、底面は平底である。
- このものの施文は、口縁直下に沈線が1条めぐる他は無文であるが、朱ぬり痕が器表面に認められる。
- 色調は、内外とも灰赤色一部黒色、底面赤黒色を呈する。胎土・焼成とも良好である。

〔壺形土器〕 -94

(K 1 II) (完形品)

94



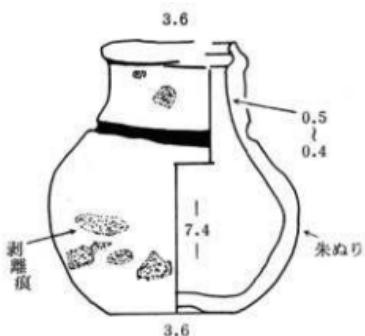
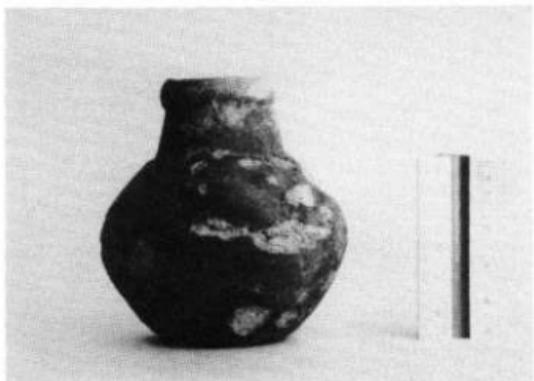
〔壺形土器〕 -94 (精製)

☆ ここに掲げたものは、A地区K1 グリットⅡ層出土の第八群土器（大洞C2式）である。

- このものは、口縁が平縁であるが、わずかに上方にカーブする口縁で、頸部は、直立に近いが、わずかに末広がりである。

また、胸部は下ぶくれする洋梨状の形態をなす器形で、典型的な大洞C2式壺形土器で、一タイプとして把握されるものである。なお、底面は上げ底である。

- 施文は、沈線が頸部下に1条、粘土粒をもつ沈線が肩部に1条、肩部下に3条の平行沈線が施文される。胸部は無文で剥離痕が認められる。
- 色調は、外面上半黒色、下半赤褐色、内面黒色、朱ぬり痕が残る土器である。



〔壺形土器〕-95 (精製)

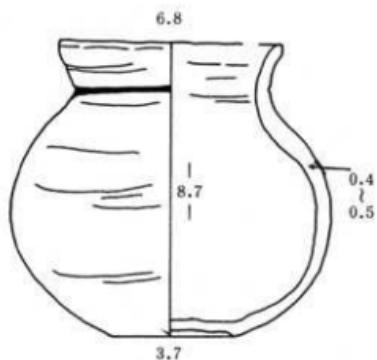
☆ ここに掲げたものは、A地区K2 グリットⅡ層出土の第八群土器（大洞C2式）である。

- ・ このものの器形は、平縁で、口縁が肥厚するものである。頸部は、やや末広がりの器形で、胴部はふくらみが強く、最大幅は胴部中央下にある。底面は、中央部で上げ底となる。
- ・ 施文は、肩部に沈線が1条めぐる他は無文のものであるが、内外とも朱ぬりのものである。
- ・ 色調は、内・外とも朱ぬり土器なるも、朱ぬり前は黒褐色のものと考えられる。

〔壺形土器〕 -96

〔J 1 III〕

96

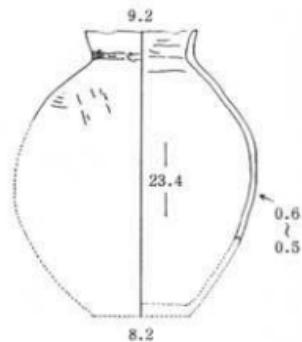


〔壺形土器〕 -96 (精製)

- ☆ ここに掲げたものは、A地区J 1 グリットⅢ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、平縁で口径が大きく、広口壺と言っても良いものである。口頸部は外反するが肩部は張らず球形に近い胴部をもつもので、底面は上げ底である。
 - 施文は、頸部と胴部の境に沈線が1条めぐる他は無文である。
 - 色調は、外面茶褐色一部黒色、内面茶褐色一部黒色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

〔大形、壺形土器〕 -97 (J 1 III) (現存 $\frac{1}{3}$ — 図上復原)

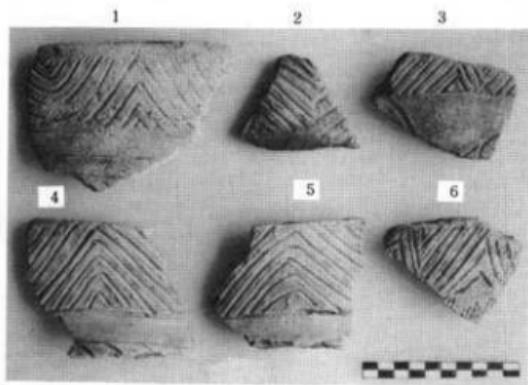
97



〔大形、壺形土器〕 -97 (粗製)

- ☆ ここに掲げたものは、J 2 グリットⅢ層出土の第十群土器（大洞A式）である。
- このものの器形は、口縁は平縁をなすもので、口頸部は、外反氣味である。肩部は張らず胴部中央下に最大幅があるようで、胴部および底部は欠失して不明である。しかし口頸部の器形から第十群土器とした。
- 施文はなく無文であるが、整形痕が横位、斜位に認められる。
- 色調は、外面明黄褐色一部黒色、内面黃褐色、胎土・焼成とも良好なるも整形不良である。

☆ (1~6) → K 2 II



7 8 9 10 11

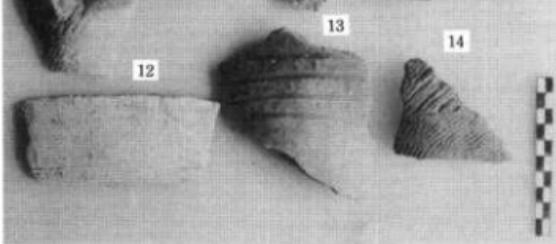


13

14

☆ (7~14) → K 2 II

12

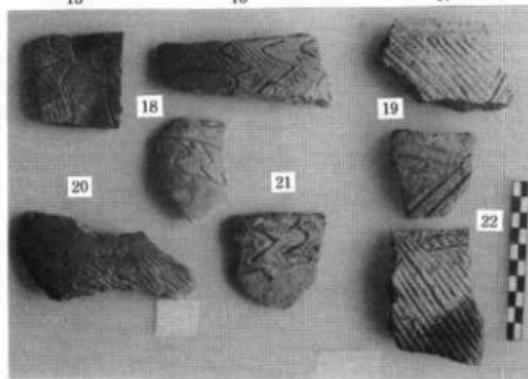


15

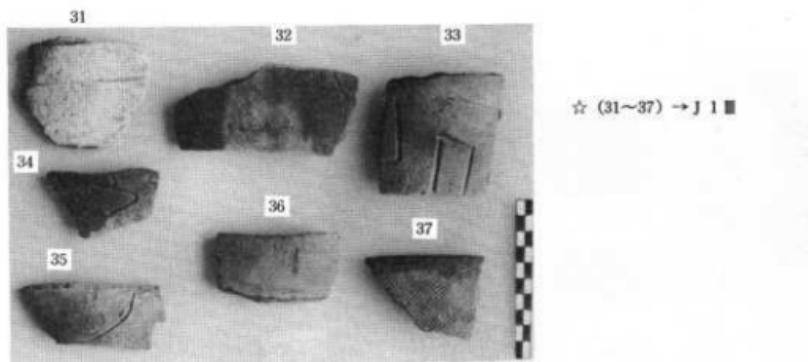
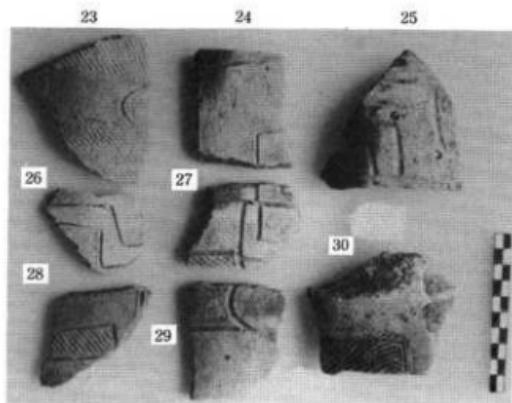
16

17

☆ (15~18+20+21) → K 2 II
 ☆ (17+19+22) → J 1 II

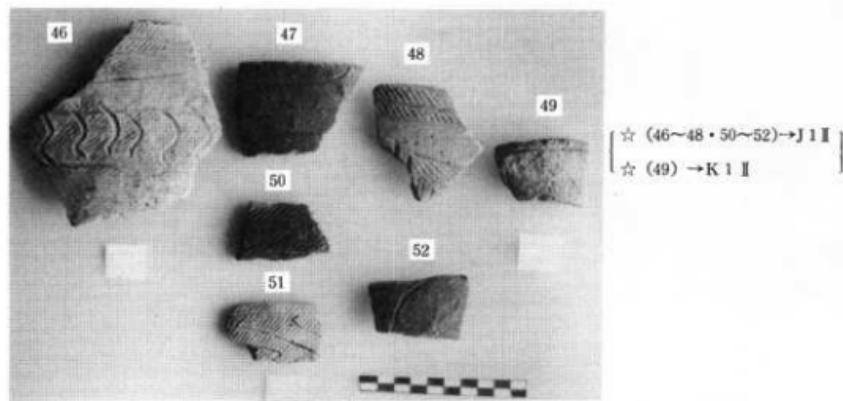
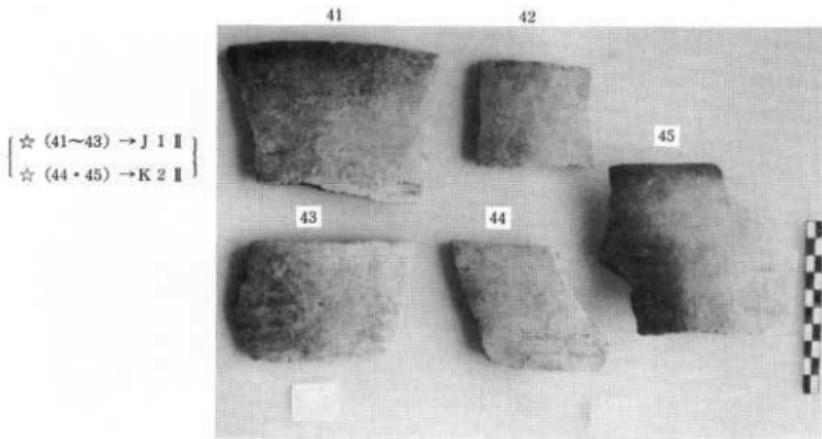


☆ (25) → O 10 II
 ☆ (30) → K 2 II
 ☆ (23 • 24 • 25 • 26 • 27 •
 28 • 29) → J 1 III



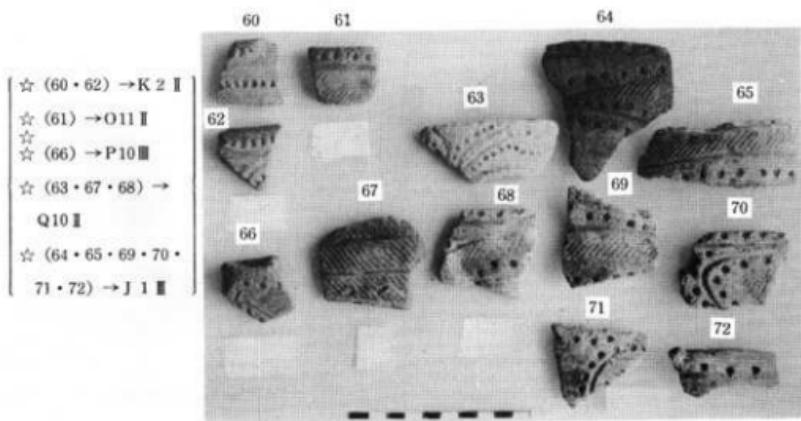
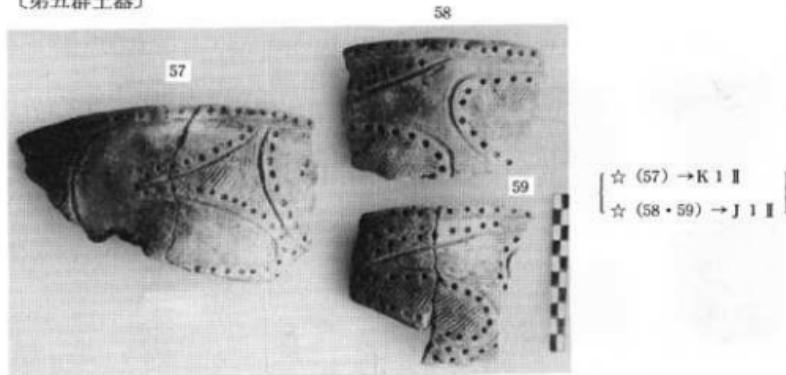
☆ (38~40) → K 2 II



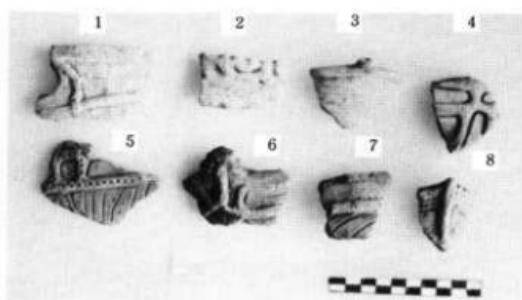


☆ (53・54) → K 2 II

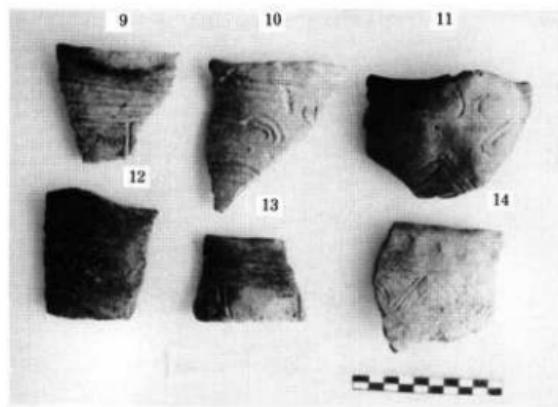




(A地区、J 1 グリット出土、土器)

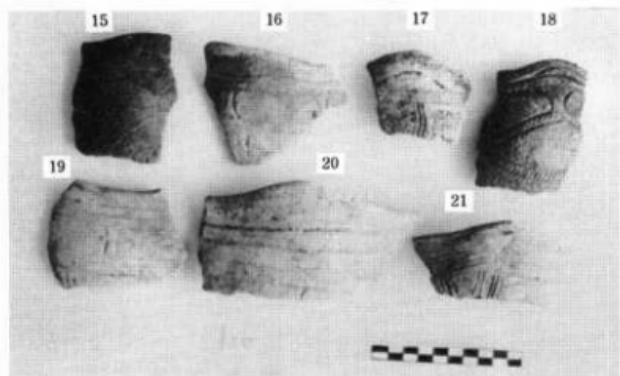


☆ (1~8) → J 1



☆ (9~14) → J 1

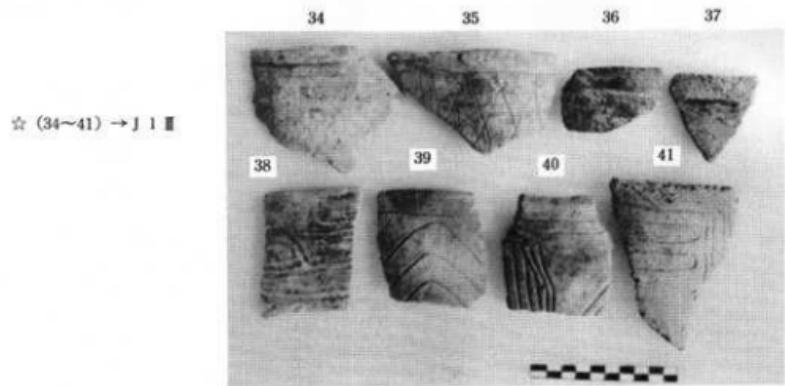
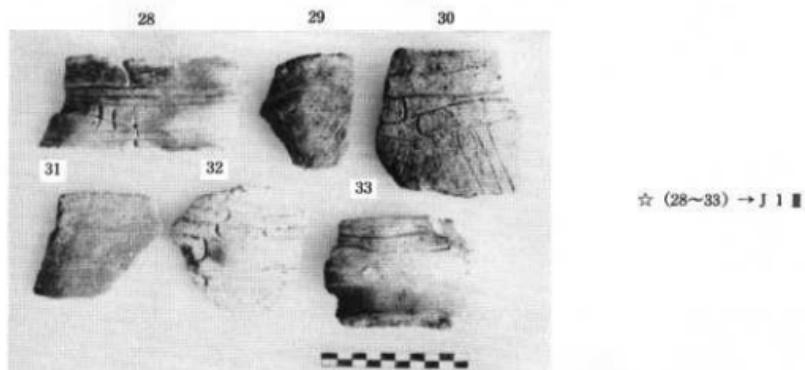
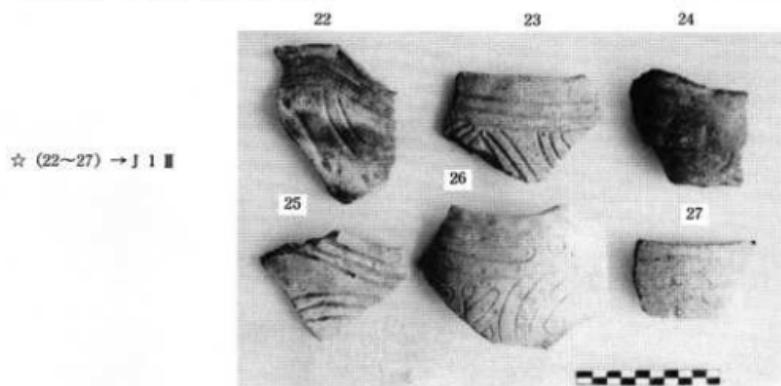
☆ (15~21) → J 1



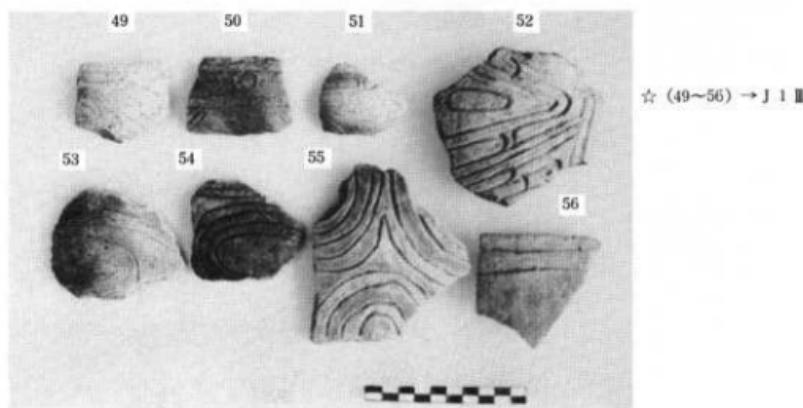
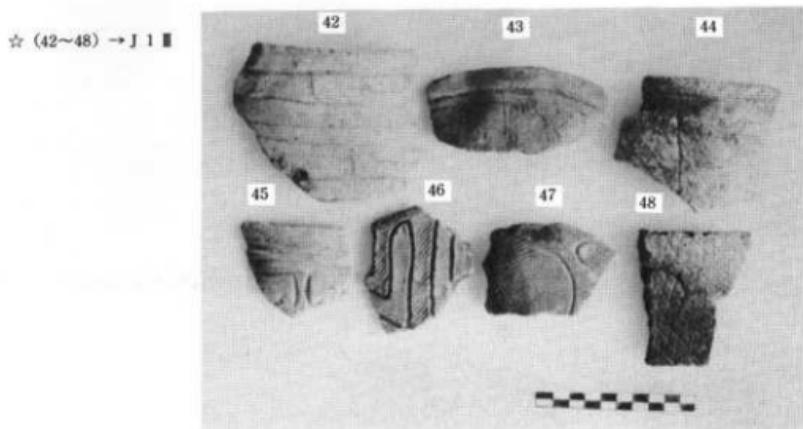
〔A地区出土、土器〕 - (第三群土器)

P・L 2

(A地区 J 1 グリット出土、土器)



(A地区 J 1 グリット出土、土器)

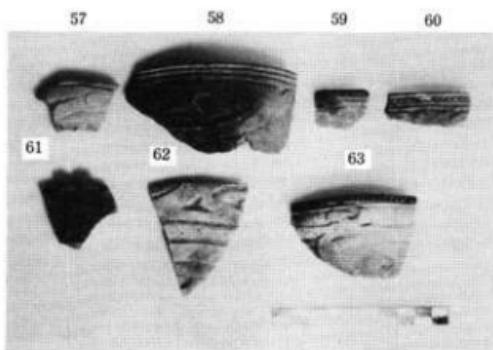


〔A地区出土、土器〕—〔第七群土器〕

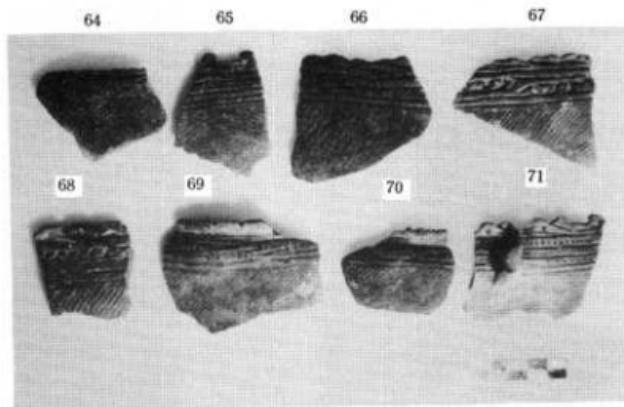
P・L 4

(A地区J1 グリット出土、土器)

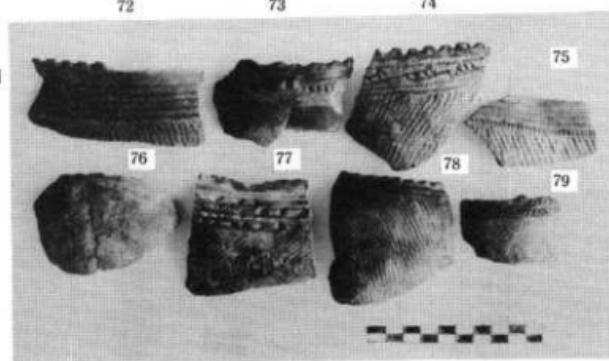
☆ (57~63) → J1 III



☆ (64~71) → J1 III



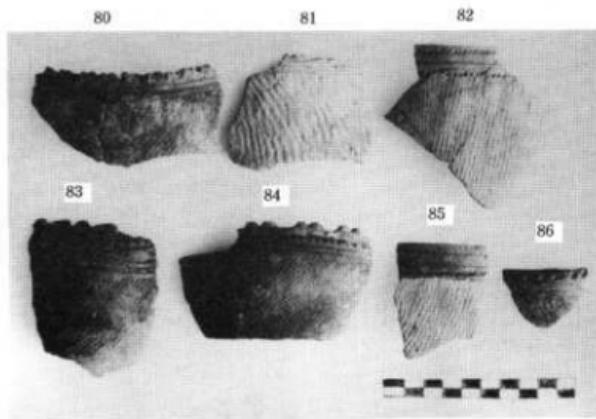
☆ (72~79) → J1 III



〔A地区出土、土器〕—(第七群土器)

P・L 5

(A地区J1グリット出土、土器)



☆ (80~86) → J 1 II

87

88

☆ (87~90) → J 1 II

89

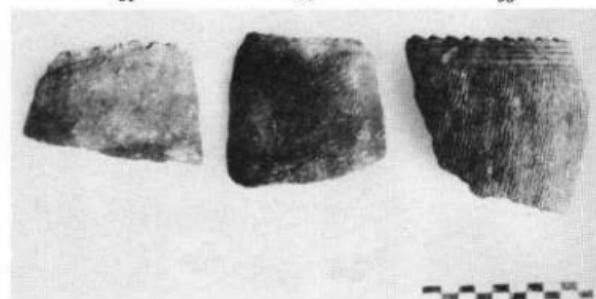
90

91

92

93

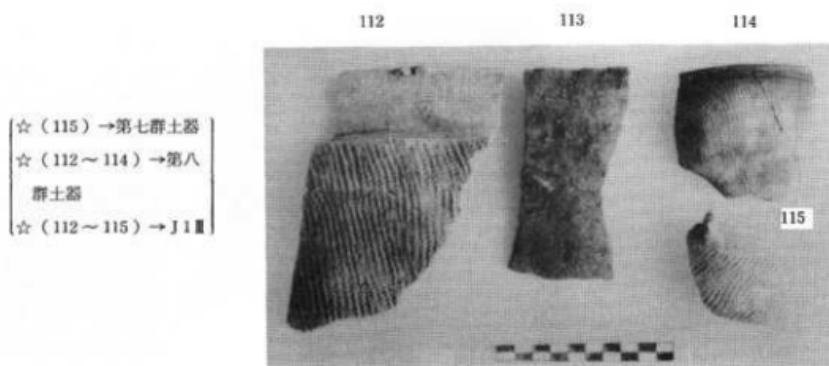
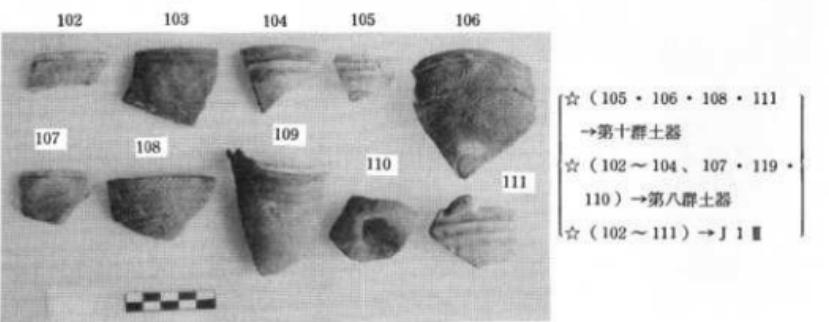
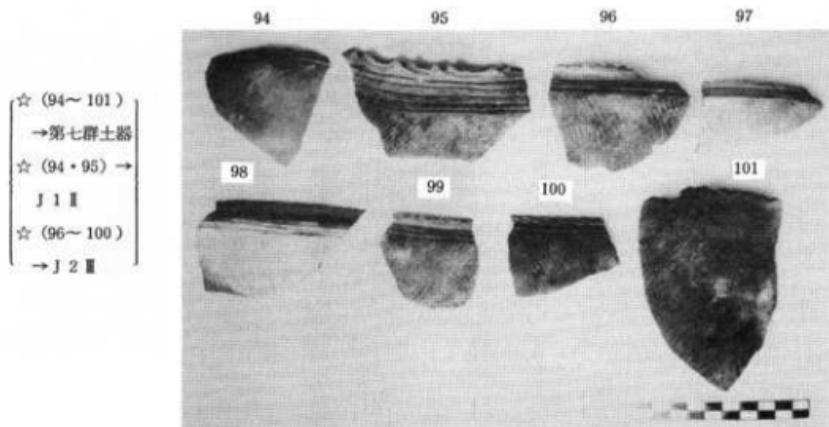
〔☆ (91) → J 1 II
☆ (92・93) → K 2 II〕



〔A地区出土、土器〕 - (第七群土器)

P・L 6

(A地区 J 1 グリット出土、土器)



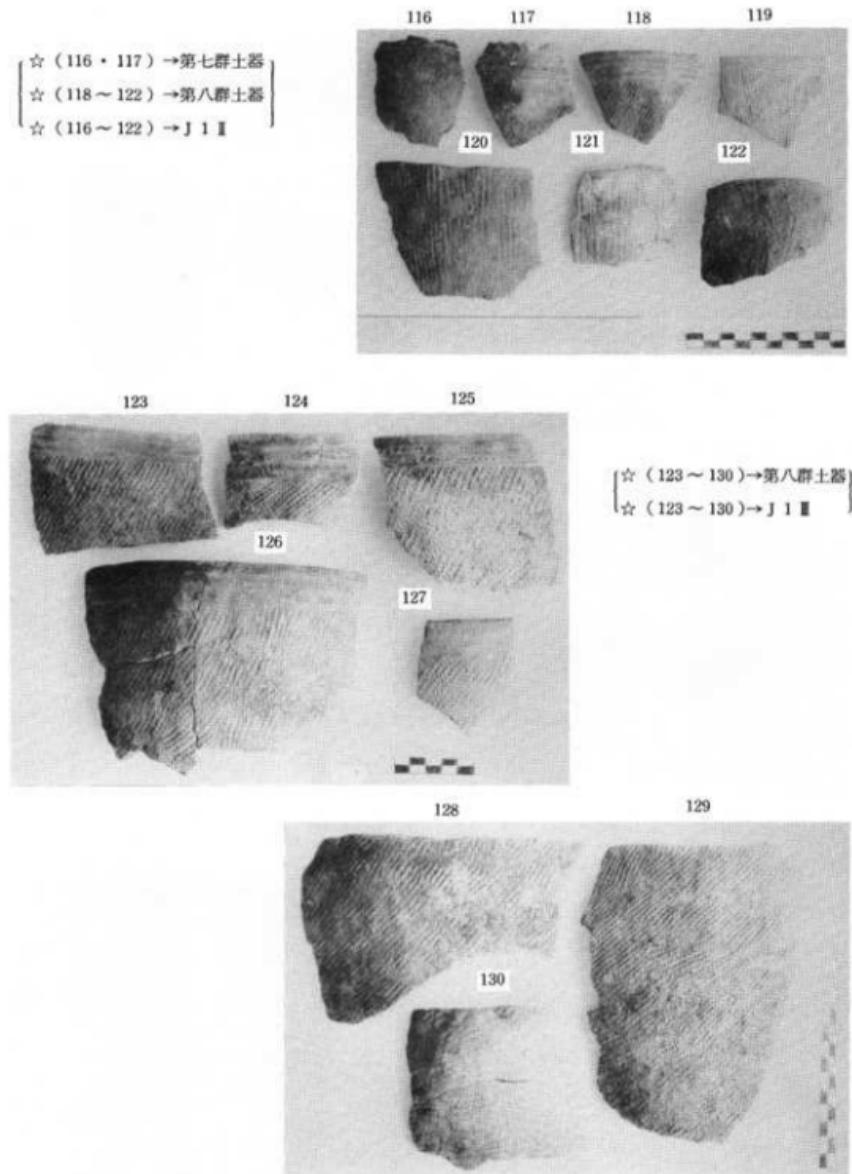
☆ (115) → 第七群土器
☆ (112~114) → 第八
群土器
☆ (112~115) → J 1 II

☆ (105・106・108・111)
→ 第十群土器
☆ (102~104、107・119・
110) → 第八群土器
☆ (102~111) → J 1 II

〔A地区出土、土器〕—(第七・八群土器)

P・L 7

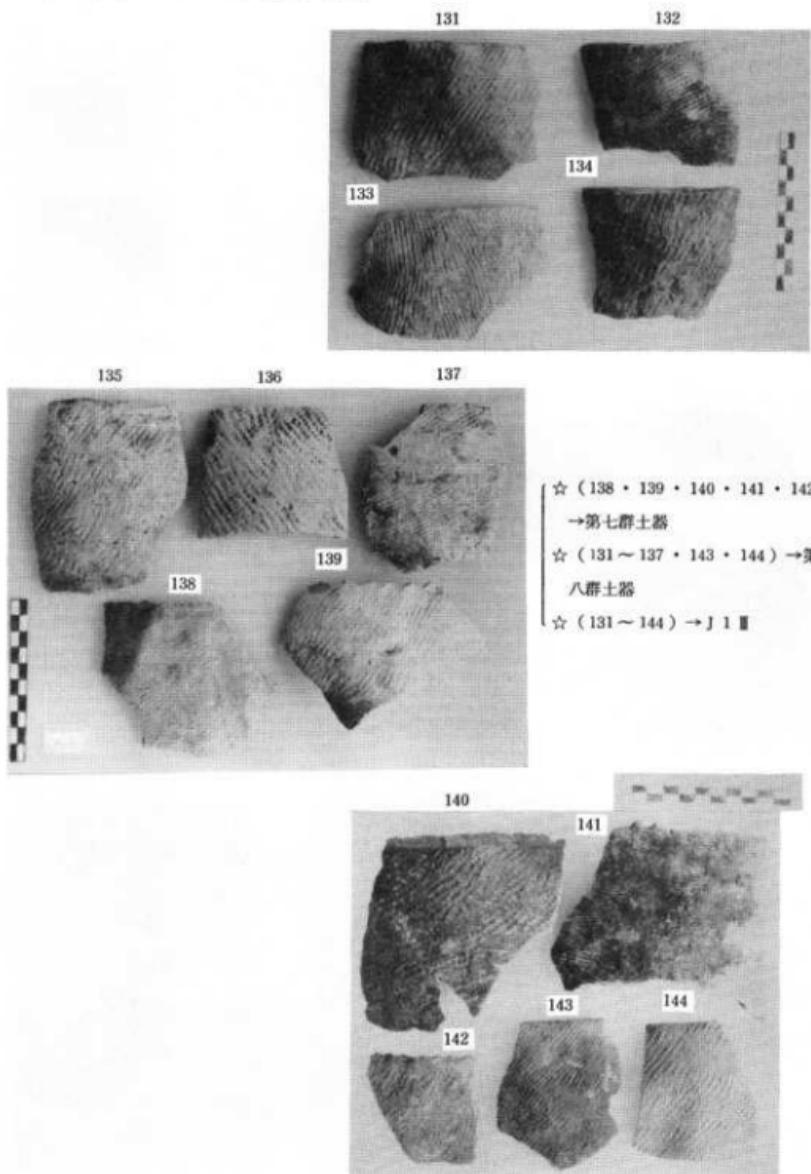
(A地区J1 グリット出土、土器)



〔A地区出土、土器〕 - (第七・八群土器)

P・L 8

(A地区 J 1 グリット、出土、土器)



(A地区 J 2 グリット出土、土器)

